

八重山諸島の考古学

6. 新里村期の概要

周辺地域とは異なる先島諸島の先史文化（下田原期、無土器期）が終わりを告げると、新里村期（12世紀～13世紀）へと続きます。沖縄諸島では、グスク時代が幕開けするのと、ほぼ同時期です。

この時期の遺跡は八重山諸島では発見数が少なく、石垣島のピロースク遺跡（第Ⅱ・Ⅲ層：石垣市教育委員会1983）、嘉良嶽東遺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター2007）、竹富島の新里村東遺跡（沖縄県教育委員会1990）、カイジ村跡遺跡（カイジ浜貝塚第2層：沖縄県教育委員会1994）があります。ナガタ原貝塚では1点のみ、滑石製石鍋を模倣したと思われる土器片が出土していません（沖縄県教育委員会1979）。また、石垣貝塚でも図上復元可能な資料や破片が出土しており（新里1997, 2003, 2004）、複合遺跡の可能性もありますが、両遺跡とも一緒に出土するほかの遺物の時期は、もう少し新しくなるようです。ほかに、中国産白磁玉縁碗や徳之島産カムイヤキなど、古手の遺物が発掘調査によって出土したり、表面採集された遺跡はありますが、本書では発掘の結果、新里村期の遺物包含層が確認された上記の遺跡を中心に紹介します。

なお、ピロースク遺跡、新里村東遺跡やカイジ村跡遺跡では、12世紀～13世紀の新里村期に続いて、中森期の初期段階である13世紀末～14世紀代の遺物も出土します。そのため、ピロースク遺跡の場合にはⅡ・Ⅲ層を主に、新里村東遺跡の場合には発掘調査報告書の「第Ⅳ章 新里村東遺跡」の項目で紹介された資料を、カイジ村跡遺跡の場合にはカイジ浜貝塚第2層の資料が、この時期の遺物にあたりと考えられます。

（1）遺跡の立地

八重山諸島における新里村期の遺跡は、先述のとおりこれまで4カ所確認されています。これらの遺跡の立地を見ると、ピロースク遺跡は内陸にある標高約18mの石灰岩小丘上、嘉良嶽東貝塚は海岸から約200mで海岸砂丘の後背地にあり標高は5m～10m、新里村遺跡は海岸線から約10mで標高3～5m、カイジ村跡遺跡は海岸から約8mで標高約3mの低地と、島の地形によって違いが見られます。しかしながら、いずれも、川や湧き水の近くに立地しており、水場や食料調達などの条件を満たした場所を選んでいたものと考えられます。そして、海からのアクセスが容易な場所であるという共通点からは、島嶼外から訪れる人びととの関わりも推測できます。

（2）人工遺物

遺跡数は少ないですが、この時期には、特徴的な遺物が見られます。ここでは、それらの資料を紹介したいと思います。

1) 土器

新里村期を代表する土器の型式には、次の2つがあります。

A. 新里村式土器

竹富島の新里村東遺跡出土の土器を標式とし、滑石製石鍋を模倣した鍋形土器です。中には滑石を潰し、その小破片を胎土に混ぜたものも見つかっています。

口縁部は直口かやや内彎し、底部外端が丸みを持つ平底です。長方形の縦耳が4つ付くという特徴も見られます（金武1994）。

B. ピロースク式土器（図15）

石垣島のピロースク遺跡出土の土器を標式とする土器です。口縁部が「く」の字状に折れる鍋形土器で、底部外端は丸みを持つ平底です。土器の内面や外面には刷毛目調整痕が見られ、ピロースク式土器や新里村式土器で確認されます。この器形は九州の土師器にも見られます。

滑石製石鍋を模倣した新里村式土器や、



図15 ピロースク遺跡出土のピロースク式土器
（石垣市教育委員会所蔵）

土師器に影響を受けたと考えられるピロースク式土器と類似する器形は、恩納村熱田貝塚でも検出されており、沖縄本島以北からの影響で出現した土器と考えられています(金武1994)。なお、この2型式のほかにも、もっと細かく分類できるのではないかと、いう研究も進められています。

2) 中国産磁器

磁器は白磁、青磁が得られています。特に中国産の白磁玉縁碗や白磁端反碗は、沖縄本島でも同時期に出土の傾向が見られ、八重山諸島では無土器期の終わり頃から登場し始めます。

磁器は生産地、消費地双方からの研究も進められており、年代を特定するための重要な資料となります。発掘調査で出土した白磁や青磁の多くは、次の中森期に属するものです。出土した磁器によって遺跡の年代が与えられ、同地(ピロースク遺跡、カイジ村跡遺跡)や隣接地域(新里村東遺跡と西遺跡との関係)で時代が異なる遺物包含層が確認できるという事実は、その土地の住みやすさや、対外的な交流の場として適しているかなど、立地の面からも検討が進むきっかけとなります。

①白磁

ピロースク遺跡と新里村遺跡で中国産白磁玉縁碗と白磁端反碗が出土しています。これらは、11世紀末～12世紀前半頃のものと考えられ、無土器期の終わり頃から八重山諸島に入ってきます。

新里村西遺跡でもこれらの白磁碗が出土しますが、約500mも離れている新里村東遺跡と西遺跡の遺物が接合できた例もあることから(金城2008)、古手の白磁は新里村東遺跡の時期のものと考えられています。

②青磁

青磁はピロースク遺跡で古手の楡描文皿や劃花文碗などが得られており、このことから、ピロースク遺跡の頃に青磁が出土し始めることが分かります。なお、新里村東遺跡などでは青磁の出土はなく、ピロースク遺跡のほうが、若干、新しい要素を含んでいると考えられています。

3) 石製品

数は少ないですが、石製品も出土しています。

ピロースク遺跡2層からは石斧と凹石、新里村東遺跡からは石斧、敲石、石皿、砥石、カイジ村跡遺跡からは磨石が出土しています。

この時期には、前の無土器期に比べて極端に石器が減ります。同時に、少量ながら鉄鍋や鉄鏃といった、無土器期には見られなかったものが見つかることから、鉄製品が入ってきたことにより、石器の使用が減ってきたとも考えられています。

4) 貝製品

貝製品も先史時代に比べて、極端に減ってきますが、実用品としてのスイジガイ製利器やヤコウガイ製の敲打具、貝錘と考えられる二枚貝やタカラガイ製の資料が出土しています。

また、この時期から出土する貝包丁(クロチョウガイ製)に分類された物は、穂摘み具の可能性が指摘されており、ピロースク遺跡で出土した炭化麦や炭化米と併せて考える必要があるでしょう。ピロースク遺跡ではその両方が出土しています。

5) 骨製品(図16)

骨製品も少ないですが出土しています。実用品である刺突具(報告書では、尖頭器とされたものもあります)やへら状製品のほか、ピロースク遺跡からは1点で、装身具と考えられる有孔の椎骨製品が得られています。

刺突具の用途としては、魚を突くためのヤスなども含まれます。なお、新里村期の遺跡からは、装着するために抉りや刻み目を入れたり、段を設ける骨製品が出土し始めます。

6) 陶器

原(歴)史時代の比較的早い段階から、先島諸島には褐釉陶器が入ってきたようです。下地和宏は、この褐釉陶器の出土が多いという傾向を、「先島諸島の特徴」とする考えを述べています(下地2008)。

なお、褐釉陶器はほとんどが中国産と考えられています。カイジ村跡遺跡出土資料のうち、酒壺の頸部片と見られる1点は、素地がタイ産鉄絵合子のもので似ていることから、タイ産の可能性が指摘されています。それは、新里村期より新しい時期の遺物です。



図16 ピロースク遺跡出土の骨製品(石垣市教育委員会所蔵)

なお、出土している陶器には、茶入れ、水注、黒釉陶器天目茶碗、黒釉陶器洗、壺、鉢などがありますが、中には、出土層位が不明なものもあり、新里村期よりも新しい時期の遺物である可能性があるものも含まれています。

なお、新里村東遺跡からは、計115点の破片が出土しており、その中には中国元朝の公用文字であるパスパ文字を刻印したものが出土しています。パスパ文字は1272年から導入され、1310年にはカリカ文字に代わることが分かっています。このことから、これらの壺の中には13世紀後半～14世紀初頭に位置づけられる可能性が指摘されたものもあります（沖縄県教育委員会1990、金城2008）。

7) 須恵器

いわゆるカムイヤキと呼ばれる、徳之島で焼かれた灰色をした焼き物が、ビロースク遺跡や新里村東遺跡、カイジ村跡遺跡で出土しています。現在ではカムイヤキ陶器とも呼ばれていますが、報告書の記載に基づいて、須恵器と紹介します。

カムイヤキ古窯群の調査では炭化物等を使った年代測定も実施されていて、その結果、11世紀から13世紀頃に操業されていたことが想定されています（新里亮2008）。

カムイヤキは多様な器種が作られますが、八重山諸島で出土する資料のほとんどは壺です。ビロースク遺跡、新里村東遺跡から、壺の破片が多く見つかっています。なお、新里村東遺跡からは、碗形と考えられる資料も出土していますが、碗形の出土数は多くありません。

八重山諸島には無土器期の終わり頃から入ってきたようですが、伝世品と考えられる資料が近世村跡で発見された例もあります（石垣市2008）。

8) 鉄製品と鞆の羽口

鉄製品は新里村東遺跡で鉄鍋片が、カイジ村跡遺跡で鉄鏟と板状製品が出土しています。無土器期の終わり頃から、船釘（またはタガネ）や鉄鑿といった製品が僅かながら出土し始めることから、八重山諸島の人びとは石器に変わる便利な道具としての鉄を知り、そして大切に利用していたようすがうかがえます。

特にカイジ村跡遺跡では、鉄製品と一緒に、鞆の羽口が、第1層、第2層下部からそれぞれ1点ずつ出土しています。鞆というのは、鉄を精錬する際、炉を高温にするため空気を送る装置のことです。羽口は鞆から炉の中に空気を送る際に鞆と炉を繋ぐ管のことを言います。鍛冶道具である羽口が出土するという事は、遺跡の周辺になんらかの鍛冶の痕跡があったと考えられるのです。ただし、鍛冶技術の一般民衆への普及という点からは、16世紀～17世紀前半以後と推察されています（大城1983, 1990, 2007）。

『カイジ浜貝塚』の報告書には、出土した羽口について素材やサイズの面から興味深い指摘があります（金城1994）。それは、

八重山地域での羽口は、砂岩製の羽口が多く、ヤマバレー遺跡、与那原遺跡、上村遺跡などから出土していて、サイズも直径が17～20cmと大型の羽口である。土製の羽口の報告はないようである。今回出土した羽口の復元直径は5.1cmを測り、与那原遺跡や上村遺跡出土の羽口と比較して小さく、小型の羽口として考えられるところである。土製羽口は県内では沖縄本島・宮古島の遺跡から多く出土していて小型のものであり、砂岩製羽口の報告は沖縄本島・宮古島の遺跡からはない。羽口の素材やサイズの面からも八重山地域と区別できる場所がある。そのような面からも今回出土した土製羽口は時期的な側面や鍛冶技術を検討する上では貴重な資料である。

と、いうものです。このことからわかるように、カイジ村跡遺跡出土の「小型の羽口」は送風機である鞆そのものの構造と、それに伴う使用方法、そして上昇温度などが、他の遺跡から見つかる砂岩製の羽口とは異なる可能性も考えられます。

9) 玉類 (図17)

ビロースク遺跡からは、勾玉4点とガラス製玉5点が出土しています。そのほとんどが第1層からの出土ですが、ガラス製玉2点は2層からの出土です。

先史時代の下田原期や無土器期では、貝や骨で作った小玉が主流でしたが、新里村期からは勾玉やガラス製玉などが出土し始め、人びとが広く対外的な交流を始めたことが、ここからも分かります。沖縄本島周辺では、八重山諸島よりも早い段階か



図17 ビロースク遺跡出土の玉類
(石垣市教育委員会所蔵)

ら貝や骨製以外の玉類の出土が見られます。島産の石やヒスイなどを利用した小玉や丸玉、平玉などは、縄文時代相当期（沖縄貝塚時代前期）から出土し始めます（知念・新田1983、新里2007）。弥生～平安時代相当期（沖縄貝塚時代後期）にもガラス製の丸玉や小玉、石製、土製の勾玉などが出土しますが、現在のところ、もっとも多く確認されているのは、グスク時代からです（知念・新田1983、上原2003、岸本2003）。また、滑石製石鍋や石鍋模倣土器が出土した恩納村熱田貝塚でも石製の勾玉が出土しています。

10) 銭貨（図18）

ビロースク遺跡からは、9種類の銭貨が見つかっています。

中国唐時代の開元通宝をはじめ、主に北宋時代の銭貨が出土しています。僅かではありますが、新里村期の遺跡からは北宋時代の陶磁器も出土していることから、双方の遺物に矛盾はないと考えて良いでしょう。また、出土した銭貨はすべて、首里城ほか、沖縄諸島のグスク遺跡からも出土しており（上原2003）、八重山諸島だけに入ってきたものではないようです。うち、開元通宝2点と元祐通宝には2孔ずつ穿たれています。3点とも文字を避けるように穿孔され、先述の勾玉や玉類の出土と併せて考えると、銭貨としての価値だけではなく、ペンダントや、紐を通して回して遊ぶ遊具として利用された可能性があります。



図 18 ビロースク遺跡出土の銭貨
（石垣市教育委員会所蔵）

<参考・引用文献一覧>

- 石垣市 2008『石垣市史考古ビジュアル版』第5巻陶磁器から見た交流史 石垣市
 石垣市教育委員会 1983『ビロースク遺跡—沖縄県石垣市新川・ビロースク遺跡発掘調査報告書—』石垣市文化財調査報告書第6号 石垣市教育委員会
 上原静 2003「第4章 グスク時代」『沖縄県史』各論編第2巻考古 沖縄県教育委員会
 大城慧 1983「沖縄における鉄関連遺跡と鉄器資料について」『南島考古』第8号 沖縄考古学会
 大城慧 1990「沖縄グスク時代鉄器・鉄滓出土地地名表」『文化課紀要』第6号 沖縄県教育委員会
 大城慧 2007「沖縄貝塚時代後期出土の鉄器について」『南島考古』第26号（多和田真淳先生生誕百年記念特集号）
 沖縄考古学会
 沖縄県教育委員会 1979『ナガタ原貝塚・船越貝塚発掘調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第24集 沖縄県教育委員会
 沖縄県教育委員会 1990『新里村遺跡—竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第97集 沖縄県教育委員会
 沖縄県教育委員会 1994『竹富島カイジ浜貝塚—竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第115集 沖縄県教育委員会
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007「嘉良嶽東貝塚」『沖縄県立埋蔵文化財センター企画展 発掘調査速報展2007』
 沖縄県立埋蔵文化財センター
 岸本竹美 2003「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」『紀要沖縄埋文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター
 金城亀信 1994「第IV章 出土遺物」「第VII章 調査の成果」『竹富島カイジ浜貝塚—竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書第115集 沖縄県教育委員会
 金城亀信 2008「【コラム】竹富島新里村遺跡出土の中国産褐釉陶器について」『石垣市史考古ビジュアル版』第5巻陶磁器から見た交流史 石垣市
 金武正紀 1994「土器→無土器→土器—八重山考古学編年試案—」『南島考古』第14号 沖縄考古学会
 下地和宏 2008「【コラム】宮古諸島出土の輸入陶磁器」『石垣市史考古ビジュアル版』第5巻陶磁器から見た交流史 石垣市
 新里亮人 2008「【コラム】徳之島カムイヤキ陶器窯跡について」『石垣市史考古ビジュアル版』第5巻 陶磁器から見た交流史 石垣市
 新里貴之 1997「八重山外耳土器の形式学的検討」『人類史研究』第9号（上村俊雄先生還暦記念号） 人類史研究会
 新里貴之 2003「先島における歴史時代土器出現期の様相」金武正紀氏の新たな飛躍を祝う会記念シンポジウムレジュメ
 新里貴之 2004「先島諸島におけるグスク時代煮沸土器の展開とその背景」『グスク文化を考える—世界遺産国際シンポジウム<東アジアの城郭遺跡を比較して>の記録—』 新人物往来社
 新里貴之 2007「南西諸島出土のヒスイ製品」『南島考古』第26号（多和田真淳先生生誕百年記念特集号） 沖縄考古学会
 知念勇・新田重清 1983「玉類の種類と推移」『沖縄歴史地図<考古編>』 柏書房